

キハダ 大西洋

Yellowfin Tuna, *Thunnus albacares*



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

最近の動き

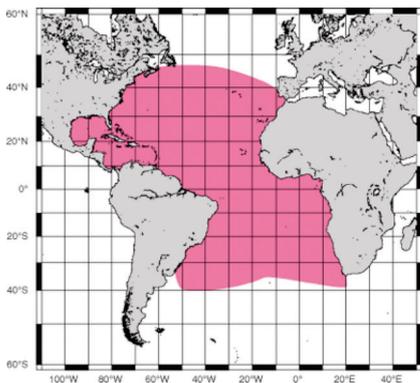
2013 年の総漁獲量は 9.3 万トン（予備集計）で前年の 90% であった。資源評価は 2011 年 9 月に ICCAT により行われ、MSY は 14.5 (11.4 ~ 15.8) 万トンと推定され、2013 年の漁獲量より大きい。2010 年の資源量は MSY レベルより小さい ($B_{2010}/B_{MSY}=0.85$ (0.61 ~ 1.12)) と見られる。また、2010 年の漁獲圧は、MSY レベルより小さい ($F_{2010}/F_{MSY}=0.87$ (0.68 ~ 1.40)) と推定された。しかしながら、資源評価の不確実性を考慮すると、2010 年に乱獲状態でなく、かつ漁獲圧が過剰でなかった可能性は 26% と低い。

生物学的特性

- 寿命：7 ~ 10 歳
- 成熟開始年齢：3 歳
- 産卵期・産卵場：周年・表面水温 24℃以上の海域
- 索餌期・索餌場：分布域に等しい
- 食性：魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

利用・用途

刺身、すし、缶詰など



大西洋におけるキハダの分布域

漁業の特徴

主な漁業国はフランス、スペイン、ガーナである。日本は、はえ縄でメバチを主対象として漁獲している。フランスとスペインはまき網、ガーナは竿釣りが主体である。1980 年頃から、漁獲はまき網が主体となっている。漁場は熱帯域を中心に広く分布し、まき網と竿釣りではギニア湾が主漁場である。漁業は周年行われている。

漁業資源の動向

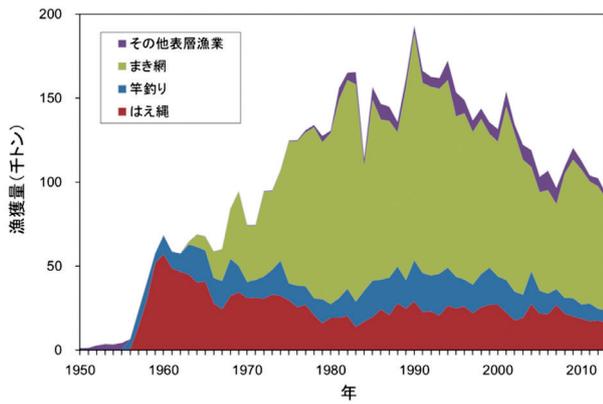
大西洋におけるキハダ漁業は 1950 年頃に始まり、1955 年頃からは竿釣り及びはえ縄が開始した。当初ははえ縄が主体であったが、最近年は、全漁獲量のうち 70% がまき網、11% が竿釣り（大部分が東部大西洋）、16% がはえ縄で漁獲されている。1980 年以降、漁獲量は 10 ~ 19 万トンの間で変動し、2013 年は 9.3 万トン（予備集計）であった。

資源状態

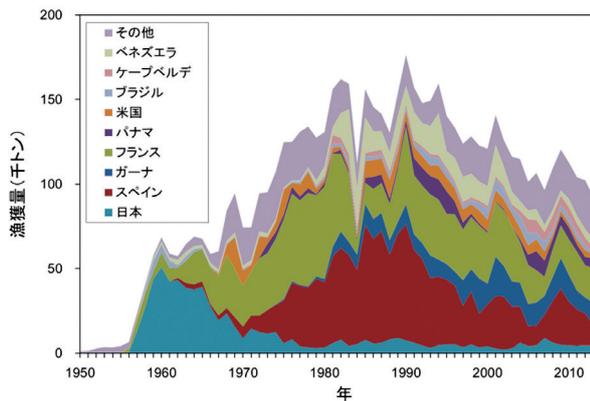
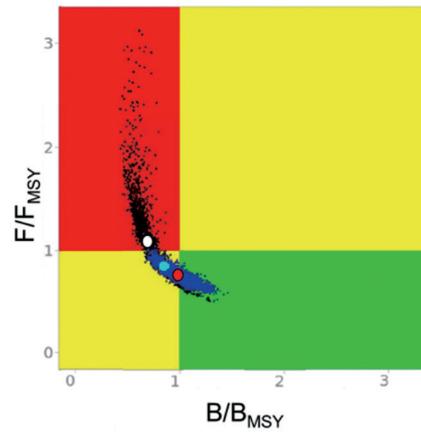
最新の資源評価は 2011 年に ICCAT により行われた。MSY は ASPIC（プロダクションモデル）で 14.0 万トン（11.4 ~ 15.0 万トン）、VPA（年齢別モデル）で 14.9 万トン（14.0 ~ 15.8 万トン）と推定され、2013 年の漁獲量 9.3 万トンを上回っている。2010 年の資源量は MSY レベルより小さい ($B_{2010}/B_{MSY}=0.85$ (0.61 ~ 1.12)) と見られる。最近年（2010 年）の漁獲圧は、MSY レベルより小さい ($F_{2010}/F_{MSY}=0.87$ (0.68 ~ 1.40)) と推定された。前回（2006 年）の資源評価より悲観的な結果である。努力量の増加は、資源量を減らす危険性があり、キハダとともに漁獲される種（特にメバチ）に悪影響を与える懸念がある。

管理方策

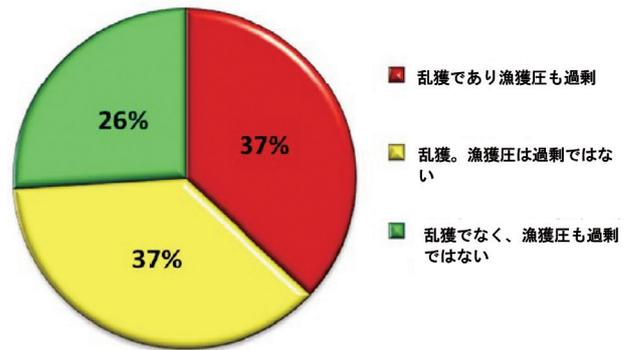
- 有効漁獲努力量は 1992 年レベルを超えないようにする（1993 年勧告）
- 小型魚の保護（FADs を利用するまき網の禁漁期、禁漁区域の拡大、大型漁船の厳密な隻数規制）



大西洋におけるキハダの漁法別漁獲量



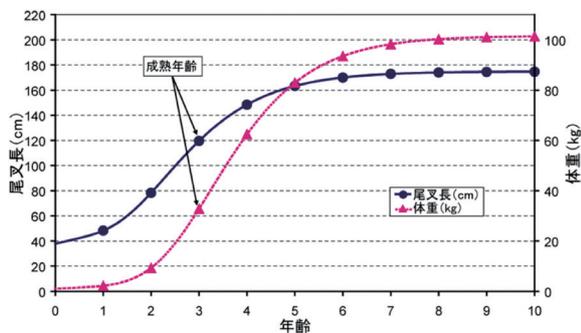
大西洋におけるキハダの国別漁獲量



大西洋キハダの資源解析結果 (ICCAT 2013)

上：非平衡プロダクションモデルとVPA (2-BOX) による解析当時の最新年(2010年)の資源状態。下：不確実性を考慮した2010年の資源状態(不確実性を考慮した。各ブートストラップ点の分布状況)

上図の縦軸は漁獲圧、横軸は資源量で現状/持続可能な値の比で示してある。黒色、青色の小さな丸は、一つ一つがブートストラップ解析の結果で、それぞれプロダクションモデル、VPAの結果を示している。白色の丸と赤色の丸は、それぞれのブートストラップ結果の中央値。水色の丸は、2つのモデルの全てのブートストラップ結果の中央値。



大西洋におけるキハダの成長

キハダ (大西洋) の資源の現況 (要約表)	
資源水準	中位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近5年間)	9.2 ~ 12.0 万トン 平均: 10.6 万トン (2009 ~ 2013 年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	0.4 ~ 0.5 万トン 平均: 0.5 万トン (2009 ~ 2013 年)
最新の資源評価年	2011 年
次回の資源評価年	2016 年